

2024年4月14日復活節第3主日説教

旧約聖書 ミカ書4章1－5節
使徒書 使徒言行録4章5－12節
福音書 ルカによる福音書24章36b－48節

復活節も第3主日となりました。本日の福音書は、B年ですがルカによる福音書にある、復活したイエス様が弟子たちに出会う箇所です。本日の箇所の冒頭で、「こう話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた」（ルカ24:36）とあります。先週のヨハネによる福音書20章にあるお話を思い起こさせるようなイエス様の登場の仕方です（文書の成立年代としては、このルカの記述の方が先でしょう）。復活されたイエス様は、弟子たちに対して「平和があれ」と語りかけたのです。この記述は、マタイやマルコにはありませんが、このお話は、イエス様の復活と、「平和」という事柄が大きくかかわっていることを示します。

このイエス様が語る平和は、人間的な視点における平和ではなく、主なる神様の観点での平和です。まことの平和と言ってもいいかもしれません。それは、イエス様の誕生から活動、そして復活まで含めたご生涯を通して示される事柄ですが、本日の旧約日課にもその予兆的事柄が示されています。

本日の旧約日課は、ミカ書です。著者の預言者ミカは、預言者イザヤと同じ時代に、イスラエルの南ユダ王国で活動したと考えられています。預言者ミカが第一イザヤと同時代の人とするならば、紀元前8世紀から7世紀のころに活動した人と考えられます。内容的にも類似する部分が多くあります。

今日の箇所は、細部を除いてイザヤ書2章2節から5節とほぼ同じ内容です。その内容をまとめますと、終わりの日に、エルサレムの神殿が高くそびえたち、ヤコブの神、すなわちイスラエルの神が、諸国民の争いを裁き、もはや人は戦うことを学ばなくなるということです。「主は多くの民の間を裁き、遠く離れた強い国々のためにも判決を下される、彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す、国は国に向かって剣を上げず、もはや戦いを学ぶことはない。」（ミカ4:3）という箇所は、イザヤ書の言葉として有名ですが、ミカ書も同様のことをここで語っているのです。これが『聖書』が示すまことの平和、主なる神様が望む平和です。

「その剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す、国は国に向かって剣を上げず、もはや戦いを学ぶことはない」、それは戦争が単に終わったという平和ではなく、軍事力のバランスが保たれているので戦闘が派生しないという平和でもありません。もちろん、圧倒的な軍事力で一方的に誰かが勝利したという平和でもありません。すべての人が、戦いの道具も持たず、戦いのやり方も学ばない平和です。この平和は、『聖書』を通して示される主なる神様の視点の平和ですから、教会のみならず、ユダヤ教、イスラム教を信じる人々とも共通する平和と言えます。しかし、あまりに理想過ぎて歴史上一度も実現しなかった平和といえます。また、わたしたちの国はイエス様の教えを基とする国ではありませんが、憲法にはこの平和が影響していると言えるかもしれません。

さて、そのような平和の日がいつ来るのか、だれでもそのような疑問を持ちます。預言者ミカは、イザヤと同じくその答えを「終わりの日に」（ミカ4:1）とだけ述べま

す。「終わりの日に」という訳は、ほかの箇所にもありますが（民数4:30）、そのほかでは「後の日」（創世49:1、民数4:14、）と訳されている箇所もあります。終末的な決定的な日という意味もあると同時に、これからくる日という意味でもあるのです。いずれにしても、それが未来の事柄であろうということは確かですが、具体的にいつの日かわかりません。

預言者ミカが活動している南ユダ王国が新バビロニア帝国によって滅ぼされて終わる日（紀元前586年）なのか、その新バビロニア帝国がペルシャによって滅ぼされ、イスラエルの民がバビロン捕囚から解放される時なのか（紀元前583年）、あるいは、漠然と、何か大きな世界的変化の時なのか、それともこの歴史が終わる時なのか、明確ではないのです。この預言を語った預言者ミカ自身は、今自分が共にいる南ユダ王国、あるいはイスラエルの民という集団の存続と、「終わりの日」とが無関係ではないと思っていたと考えられますが、その預言者の思いを超えて、「終わりの日」は、現在に至るまで到来していません。

さて、そのようなまことの平和を示すために、イエス様の活動があります。そして使徒の働きがあり、今日のわたしたちにまでつながる教会の活動があります。本日の使徒書は、前回と同じく使徒言行録ですが、そこでの物語は、前回のエルサレム神殿でのペトロの説教の続きです。エルサレムの宗教的、政治的指導者たちが、ペトロとヨハネを捕えようとして、それに対して、ペトロが弁明する個所です。そこでは、イスラエルの歴史を振り返りながら、イエス様の十字架と復活の出来事において、神様の意志が現れたことを告げます。言い換えると、イエス様の十字架と復活の出来事は、イスラエルの歴史を超えて、人類にとって決定的な事柄であったのですが、人々は気がつかなかったということです。それは、「この方こそ、『あなたがた家を建てる者に捨てられ、隅の親石となった石』です」（使徒4:11）と表現されている通りです。もちろん、この「あなたがた」には、イエス様を十字架につけた敵対者だけではなく、逃げてしまった弟子たち、ペトロたち弟子たちも含まれます。そのことは、イエス様の十字架の復活の出来事が、弟子たちの思いと努力で勝ち取ったようなものではないことを明らかにしています。そして、教会の歩みとは、その復活の出来事を通して始まる事柄であることを示します。そして、イエス様の十字架の前から逃げたペトロを代表する弟子たちが、主なる神様の意志を知り、もう一度希望と力を得たのが、復活のイエス様との出会いであったということです。それは、教会が、礼拝を通してイエス様と出会う場所であることを示します。それゆえに教会は存在するのです。言い換えれば、なぜ教会が存在するのか、それは礼拝を通してまことの平和を示してくださるイエス様と出会う場所であるからです。

教会は、歩み始めた最初から不完全であり、人間的な思いによって揺れ動いてしまう組織です。わたしたちの教会を含めて、ありとあらゆる教会が生成途上です。しかし、存在する理由と目標は明確です。まことの平和の実現のためです。そして、礼拝を通してイエス様に出会う、そのことを忘れない限り、失敗した弟子たちが再び力を得たように、わたしたちの希望はなくならないのです。そして、戦うことなく死に勝利されたイエス様を信じる時、まことの平和を実現する歩みが生まれるのです。わたしたちも礼拝を通して復活にイエスに出会い、「これらのことの証人」（ルカ24:48）となり、まことの平和につながる歩みを続けたいと思います。